

今は昔、朱雀院の女御と申すは、小野宮の太政大臣の御娘なり。その女御はかなく失せ給ひけり。しかるに、その女御のもとにさぶらひける女房ありけり。名をば助とぞ言ひける。かたち有様よりはじめて、心ばへをかしなければ、**女御これをむつましき者にして、あはれに思したりければ、女房もうつくしく思ひ通はして過ぎけるほどに、常陸守が妻になりてその国に下りけり。心苦しく思ひけれども、あながちにいざなひければ、国に下りても女御を恋ひ奉りけるに、かの女御に御覽ぜさせむとて、いつくしき貝どもを拾ひて、箱一具に入れて持て上りたりけるに、**女御失せ給ひにけりと聞きて、泣き悲しむといへばおろかなりや。****

しかれどもかひなくして、その貝一箱を、「これ御誦經にせさせ給へ」とて、大き大臣に奉りたりけるに、貝の中に、助、かくなむ書き入れたりける。

拾ひおきし君もなぎさのうつせ貝

今はいづれの浦に寄らまし

大き大臣、これを見給ひて、涙にむせ返りて、泣く泣く御返し、かくなむ。

たまくしげうらみうつせるうつせ貝

君がかたみと拾ふばかりぞ

まことにそのころは、これを聞きて、泣かぬ人なかりけりとなむ語り伝へたるとや。

(注) 常陸守 || 常陸国の国守。常陸は現在の茨城県。

御誦經 || 僧に読経をさせた礼として奉納するお布施

うつせ貝 || 中身が空になった貝。貝殻。

今となつては昔のことだが、朱雀院の女房と申し上げる方は、小野宮の太政大臣の娘である。その女御があつけなくお亡くなりになつてしまった。ところで、その女御の元にお仕えしていた女房がいた。名を助と言つた。容貌や姿をはじめとして、性格も優れていたの、**女御はこの助という女房を親しい者として、大切に思つていらつしたので、女房も（女御を）慕つて日を過ごしていた間に、（助は）常陸守の妻になつてその国に下つてしまつた。（助は）辛く思つたけれども、（常陸守が）強引に（助と一緒に常陸国に下るよう）誘つたため、（助は）常陸国に下つたのだがそれでも女御を恋しく思い申し上げたので、あの女御にお見せしようと思つて、美しい貝などを拾つて一組の箱に入れて持つて都に上つたところ、**女御がお亡くなりになつてしまつたと聞いて、助の泣き悲しみようはいくら言つても言い尽くせないほどであるなあ。**けれどもどうしようもなくこの貝ひと箱を、「これをお布施として奉納しなさってください」と言つて（女御の父である）太政大臣に差し上げたのだが、貝の中に、助は、このように書き入れた。**

拾ひおきし||（女御様に差し上げようと思つて）拾つておいた渚の貝殻ですが、その女御様も亡くなつてしま
い、今はどこの海岸にこの貝殻は身を寄せたらよ
いのだろうか。私もこの空っぽの貝殻と同じよう
に女御様を亡くした悲しみで心が空っぽになり、
何を心のより所にしたらよいのか分かりません。

太政大臣は、これを御覧になつて、涙にむせび、泣く泣く返しなさつたお返事はこのようなものである。

たまくしげ||美しい箱に入つた波打ち際の貝殻にはあなたの
悲しみが映し出されているようだ。（あなたがく
れた子の貝殻を）女御の形見だと思つて拾うこと
しか私にはできない。

本当にその当時は、この話を聞いて、泣かないものはいなかつたと語り伝えられているということだ。